

学生大使 実施報告書

氏名：二ツ山 杏

学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部グローバル・スタディーズコース1年

派遣先大学：ラトビア大学

派遣期間：2024/09/01～2024/09/14

1 日本語教室での活動内容

基本的に、16:10～17:40と18:00～19:00の2回授業を行った。日本語教室に来る人は、これまで全く日本語を学んだことがない人から、日常会話ができて、ことわざを学んでいる人まで様々だった。文法や文字の読み方を学びたい人と、会話をしたい人のグループに分けてそれぞれ日本人1人に対してラトビア人2,3人の割合で教えた。実際に授業をする前は、正しい日本語を教えられるか、きちんと理解してもらえるか不安だった。しかし、いざやってみると自分の知っていることや普段使っている日本語を教えるだけでもみんな興味を持ってくれた。私もラトビアについて教えてもらったりして、楽しく授業をすることができた。

会話していて、日本やラトビアの違いを発見することがよくあった。例えば、台風や地震の話をしたときには、ラトビアの人たちがそれらを経験したことがないと聞いて驚いた。また、日本では名前の由来や漢字の意味があることが面白いと言う人がいた。一方、ラトビアには名前の日があるそうだ。カレンダーに毎日それぞれ名前が書いてあり、その日が名前の日の人は誕生日のように祝われると教えてもらった。

違いは沢山あったが、共通点もあった。サンリオキャラクターのグッズを持っていたり、ジブリなど日本のアニメが好きな人が多く、話が盛り上がった。

最終日には日本の食べ物や、遊びなどの文化を紹介した。ラトビアの人は甘いお菓子が好きだと想像していたが、意外と塩からいせんべいなども人気で驚いた。また、私はけん玉を持って行ったのだが、みんな喜んで遊んでいた。中には、けん玉を見たことがある人もいて、特別な技を披露してくれた。

2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室の授業が終わった後、何度か一緒に夜ご飯を食べに行った。フードコートのような場所に行ったときには、メキシコ料理やピザのほかに、ベトナムのフォーや日本のお寿司のお店もあり、とても面白かった。そのほかに、中華料理店にも行った。

休日には動物園や、リガからバスで1時間半ほどの場所にあるルンダーレ宮殿に連れて行ってもらった。ルンダーレ宮殿にはヨーロッパのものだけでなく、17世紀ごろの日本や中国の壺などもあって意外だったが、今日本のアニメやキャラクターが人気のように昔から定期的に東洋ブームがあったのかもしれないと思い、興味深かった。

また、オペラハウスにも行った。ドレスコードがあり、シャンデリアや壁の装飾が豪華で

日本とは全く違う雰囲気が味わえた。

個人的に印象に残ったのは、ラトビア人が複数の言語を日常的に使っていたことだ。ラトビア語ではなくロシア語が母語だという人も多くいた。家族や友達と話すときはロシア語、お店の人と話すときはラトビア語、のように使う言語を変えていたのがおもしろかった。

ラトビアの人はホスピタリティにあふれていて、毎日のようにいろいろな場所に連れて行ってくれた。日本はおもてなし文化の国だとよく耳にするが、日本よりもおもてなしの心が感じられたかもしれない。私も見習いたいと思った。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私のこのプログラムへの参加目標の1つは、様々なことに挑戦することだった。これまで慣れない環境に身を置く経験をあまりしてこなかったため、日本以外の国で2週間生活することがまず挑戦になった。また、現地の人たちとの交流も私にとっては挑戦だった。私は初めて会った人と話したり、距離を縮めたりすることが苦手だ。そのため、渡航前は、現地で会う人とお互いの母語ではない英語でコミュニケーションをすることに大きな不安があった。日本語教室では毎日同じ人と過ごすわけではなかったし、学生だけでなく、社会人で歳の離れた人もいた。日本にいるときは絶対に避けているような環境の中であるべく会話を続けることを心掛けた。特に、日本語教室で仲良くなった学生さんと2人だけで出かけたときには話が弾むか心配していたが、同年代だったこともあり、1日楽しく過ごせて安心した。ほかにも、ラトビアではお店に入ったときに店員さんと言葉を交わすこともしばしばあった。ラトビアの店員さんは日本と比べてフレンドリーだった。どんなお店でも（スーパーでさえ）まずは挨拶をするという文化に最初は慣れなかったが、帰るころには自然に”hallo”や”thank you, bye”と言えるようになった。

目標の達成度は90%くらいだ。積極的にとはいかなかったが、たくさん初めてのことに挑戦できたため、ほとんど達成したと思う。

4 プログラムに参加した感想

不安だらけで渡航した。英語での注文、スリを警戒しながらの街歩き、さらには英語で日本語を教えるなど慣れないことは沢山あった。乗るはずのバスが来なくて大変な思いもした。でも、これらの現地での経験を通して以前より自信をつけることができた。このプログラムに参加して本当によかったし、また参加したいと思った。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回の経験を通して1番感じたことは、自分のコミュニケーション能力の低さだ。渡航前に想像していたよりはうまく会話することができた。しかし、一緒にラトビアに行った山形大学の先輩方や、現地の学生さん達を見てまだまだ足りないとも思った。言葉で伝え合うのも大事だが、それ以上に、積極性や非言語コミュニケーションなどの部分が大きな役割を果たしていることを実感した。今後、日本にいても海外にいても、人と関わる力は必要になると思う。これから大学で多くの人と出会って自分を高めたい。

【学生大使 実施報告書】

また、言語学習に改めて興味を持った。言語以外でのコミュニケーションの大切さにも気がついたが、英語、日本語だけでなく、ラトビア語、ロシア語など、複数の言語に囲まれて過ごすことはとても刺激的だった。次にラトビアに行ったときに、現地の言葉で買い物を楽しめるように勉強したい。



日本語教室



ラトビアのカラス



猫の家



ルンダーレ宮殿